

精神保健福祉援助実習の第一段階

小川 純子・河合 美子

キーワード：精神保健福祉、実習、見学実習、口語表現、文章表現

概要

精神保健福祉士の指定科目「精神保健福祉援助実習」を、桜美林大学では3科目に分けている。今回はその第一段階である「精神保健福祉援助実習Ⅰ」の実践報告を行う。まず、学習目標と見学実習を中心とした年間の授業計画を紹介し、授業の留意点と工夫を述べる。次に学生が精神保健福祉の現場にふれて学ぶ内容を、感想を例示しながら述べる。

担当教員は、現実感をもって現場を知ること、クラスに安心感・連帯感を育成することに留意して授業を展開し、学生に学んだことの言語化を促す。精神保健福祉施設の見学実習後には、実習日誌の記載（文章表現）と、3つのキーワードを用いての口頭発表（口語表現）を通して、学習内容の明確化と共有、学習の深化を図る。学生は、見学実習を重ねる中で精神科病院や精神障害（者）⁽¹⁾に対するイメージの変化を経験し、施設種別による特徴を理解する。年度後半は「見る」実習だけでなく「関わる」実習も加わり、学生は、対象者との交流から強い印象も受けつつ、関与観察を言語化するむずかしさも経験する。

キーワードを用いた口語表現には比較的短期間に慣れる学生も、自分の文章表現のスタイルを変えることは困難であり、適切なフィードバックなどが指導上の課題である。実習教育の過程を考慮すると、授業等で得た知識と体験からの学習が統合され、そこから次の配属実習に向けた目標設定や問題意識の醸成がなされることが望まれ、今後の授業でさらに工夫を加えたい。

はじめに

健康福祉学群精神保健福祉専修の学生は、各学年十数名の少人数で、その大半が、国家資格である精神保健福祉士の受験資格を取得する。精神保健福祉士とは、精神障害者の相談援助にたずさわるソーシャルワーカー（PSW：Psychiatric Social Worker）で、社会福祉の専門職である。この資格の取得をめざす場合は、指定科目として「精神保健福祉援助実習」（現場実習及び実習指導 計270時間以上）の履修が必須である。

精神保健福祉援助実習（以下、実習）は、精神保健医療福祉の現場体験を中心に据えた学習である。本学では、これを以下の3段階に分け、各々通年2単位の授業科目として設置している。

- 第一段階 実習Ⅰ：見学実習と事前事後指導（2年次担当）
- 第二段階 実習Ⅱ：配属実習と事前事後指導（3年次担当）
- 第三段階 実習Ⅲ：配属実習と事前事後指導（4年次担当）

配属実習は、3年次夏休み・春休み、4年次夏休みのうち2回、各90時間以上を行う。実習施設には、精神科医療機関、精神障害者社会復帰施設、精神保健福祉センター等がある。

実習を通して、学生達は自分の選んだ領域の実際を知り、同時に自分自身の特徴についても理解を深める。福祉職をめざすのか、その中でも精神保健福祉士の仕事につくのか、自分の進む道を模索する。学生にとっては自分探しの時間ともいえるであろう。実習を経て学生が3年間に見せる精神的な成長は大きく、担当教員としては、目を見張る思いがある。

中でも、「実習Ⅰ」は、精神保健福祉の現場にふれる最初の段階であり、学生は、この科目を履修しながら、「実習Ⅱ・Ⅲ」に進むかどうかを見きわめる。最初の1年間、見学実習を中心に学習して配属実習に備え、3年間かけて実習教育を行うのは、本学精神保健福祉専修のカリキュラムの特色である。今回は、この「実習Ⅰ」での授業と見学実習を中心に報告する。

「実習Ⅰ」の授業の主担当は、筆者の一人、小川である。小川の本学との関わりは、精神科病院勤務を経て、精神障害者地域生活支援センター（現在は地域活動支援センターに変更）に精神保健福祉士として勤務し、現場実習指導者として本学の学生の実習指導にあたったことに始まる。2005年度からは兼任講師として「実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業を専任教員3名と分担・協力して行っている。小川は、精神障害者支援に携わる中で、現場の空気を学生に伝えたいという思いを原動力として5年間授業を行ってきた。また、見学実習に際しては、4名の教員が交代で各回の主担当となり、事前学習・見学引率・事後学習に携わっている。こうした実践を振り返りながら、報告していきたい。

1. 授業概要

精神保健福祉援助実習のカリキュラム等については、他の機会（河合・川久保、2005；河合・友永・佐々木・加藤・川井、2009）にふれているので省略し、「実習Ⅰ」の授業概要を述べる。

「実習Ⅰ」は実習の第一段階として通常2年次に履修する。1年次に学生は、「精神医学」や「精神保健福祉論Ⅰ・Ⅱ」の講義で知識を得るが、実際には精神障害者や精神保健福祉機関との接点はまだ少なく、現場を体験する機会はごく限られたものである。このような条件の下で「実習Ⅰ」の授業を開始し、一年かけて精神保健福祉士への動機が明確になることを目途に進めている。

1-1 学習目標

「実習Ⅰ」では、下記のような学習目標を念頭に置いて、授業計画を作成している。

- 精神障害（者）に対する理解を深めること。
- 精神保健福祉の施設・機関の機能とそれらの存立の根拠となっている法体系を理解すること。
- 精神保健福祉士等現場担当者の講義から、精神保健福祉の現状と課題を知ること。
- 精神保健福祉士の役割や仕事を理解すること
- コミュニケーションや記録等の基本技能を習得すること。
- 配属実習への動機づけを高め、問題意識を育成すること。
- 自分の将来の進路を明確にするための検討材料とすること。

1-2 年間の授業計画

年間の授業は、春学期初期のオリエンテーションで開始される。このとき学生に、実習を三年間ともにする仲間としての意識を持たせることがポイントの一つである。4月から5月は、精神障害の実態や病院内の様子などを、視聴覚教材を用い、現実感を持って知ることが目標となる。その後、実習の概要・意義について考える授業を経て、実習上の留意点やマナー、提出書類や日誌への記入方法などの具体的な指導に入る。

年間の授業計画の柱ともいべき見学実習は、例年おおむね図1のように行われる。

春学期：	第 1 回	A 精神科病院
	第 2 回	B 精神保健福祉センター
	第 3 回	C 精神障害者授産施設
秋学期：	第 4 回	D 精神障害者支援施設（複合施設）
	第 5 回	E 精神科病院
	第 6 回	F 作業所
	第 7 回	G 市の社会資源 (市役所・社会福祉協議会・地域活動支援センター等)
春休み：	第 8 回	H 精神科病院（一般・精神・療養複合病院）

図 1 見学実習の年間計画（2008 年度の実施例）

春学期には、最初に医療機関の精神科病院、次に行政機関として精神保健福祉センター、最後に社会復帰施設のひとつである授産施設を見学実習先としている。見学では、施設の概要や機能の学習と職員・利用者からのお話、質疑応答が中心となる。6 月中には、第一回の見学実習を行い、その見学実習を中心に事前学習、事後学習の授業を前後に行っている。この事前学習、見学実習、事後学習のパターンを春学期末まで 3 回繰り返し、最終日に学期全体の総括を行う。夏休みには、各学生の身近な精神保健福祉関連の機関をレポートするなど、主体的に取り組む課題を出している。

秋学期は、夏休みの課題に関する口頭発表から始まる。続いて精神保健福祉の現場の実際について、視聴覚教材、現場で用いられている入院手続きの書類などを使って、臨場感を持った現場の理解に努める。また精神障害をもつ当事者による特別講義を行い、精神障害者への理解を深めることにより、専門職としての意識を持つように指導を行っている。

それらと並行して、春学期と同様に精神科病院、作業所などを見学実習を行う。秋学期末には、地域における精神保健福祉関連機関の事業がどのように展開されているのかを理解する目的で、市役所障がい福祉課、地域活動支援センター、社会福祉協議会を 1 日かけて巡り、担当者から業務・活動の現状を聴く機会を持っている。社会福祉法人運営のベーカーリーで昼食をとるなど、地域精神保健福祉の活動が実体験とともに概観できる実習になるように計画している。また、学年末、春休み中に老人病棟と緩和ケア病棟を持つ精神科病院の見学実習も行っている。以上が、2005 年以降の年間の授業計画である。

2. 留意点と工夫

次に、授業を行う上での留意点や工夫について述べる。

2-1 現実感

4月には、様々な動機を持って専門のコースに入って来た学生と、授業という枠内ではあるが、3年間にわたって体験を共有し、意見交換をする中で相互理解と自己理解を深めるという作業が始まる。精神保健福祉士は国家資格となって12年目である。近年の精神保健への関心の高まりとともに、資格への関心も高まっているように思われるが、学生の側には十分な現状の理解があるとは限らず、精神保健福祉領域における現実感をいかに持たせるかが最初の課題である。

授業開始早々に、視聴覚教材を用いて、精神疾患の発症から入院、病棟生活、リハビリテーション、退院に至る流れを学生に見せている。この先にある実習現場での体験を考えると、学生が精神保健福祉援助の原点を確認することを目的として、筆者らは毎年この視聴覚教材を使う。

フィクションとはいえ、かなりリアルな映像のため、学生の中には自分や家族・知人の体験と重ね、感情的な反応を強く起こす場合がある。また、自分が体験したことを進路に生かしたいという思いが、精神保健福祉専修の志望動機のひとつである学生もいる。このように、個人的な体験が未整理のまま実習に持ち込まれると、援助する側の役割を果たすことは容易でない場合が多い。自分自身の体験や傾向を、時間をかけ、安全に省察することが必要になるであろう。

ここでは、一人ひとりがどのように受けとめたのか、学生からの感想と疑問をリアクション・ペーパーで把握しつつ、慎重に授業を進めている。

このときの学生の感想として、代表的なものを以下にあげる。

まず、現在の精神科医療のシステムの理解に言及するものがある。

- 「患者さんが精神疾患とわかり、精神科医にかかるまでの流れがわかった。」
- 「入院から退院への流れがよくわかった。」

映像によるイメージの明確化を語るものには、「授業で聞いていたことを映像で確認できた」、「映像でより具体的に知った」、「実際見るのと勉強するとは大きな違いがあった」、「今までとは違う視点から精神科病院を見ることができた」などがある。

さらに、「一番状態の悪化している患者さんを見たことがないので正直驚いた」、「暗くて怖いイメージがあったが違うと思った」、「陽性期の症状が想像していたもの以上で少し怖かった」などの感情的な反応を示す記述もある。

「精神保健福祉士の仕事の大変さを知った」、「PSWとしてする仕事はどのようなものか、大まかに把握することができた」、「さまざまな人たちが連携して患者さんを助けるってすごいステキだなんて思った」、「自分の中のPSWへのモチベーションが上がった」等の感想も見られる。これらは、精神保健福祉士の仕事への関心や動機づけを示し、学生がより現実感を持って学習していることをうかがわせる。

2-2 安心感と連帯感

見学の後には事後学習として、体験の振り返りを行うが、その際にお互いの表情を確認しながら、安心して話せる場であることが必要である。時として体験した辛い思いを述べることもあるので、安心感と連帯感を重視している。

授業は、机椅子を円状に配置し、お互いの顔が見える位置で行う。この座席の配置はいろいろな意味を持つと考えられるが、特に初期には実習のクラスメイトとして連帯感を養うために有効である。学生はほぼ毎回同じ位置に座り、安心感を持っているようであり、欠席者への配慮なども見られる。教員としては、出来るだけ心理的な距離を少なくするように心がけ、仲間意識がもてるような学生間の会話を促している。

それぞれの体験を言葉にし、互いに耳を傾け、受けとめることが、この先も共に実習体験の積み上げを支え合う仲間としての連帯感として醸成され、これはのちに他者と連携していく力になると考える。精神保健福祉の現場では、実際にチーム内外で連携が求められることから、互いに協力し、連携する力の育成は重要なところである。

2-3 言語化の促進

授業開始初期、ビデオを視聴した回のリアクション・ペーパーから文章化の作業が始まり、また、口頭で感想も出し合う。同じ精神保健福祉コースを選択した学生とはいえ、少人数の学生同士の中で精神保健福祉に関する自分の感想、疑問などの意見を述べることには、初めは抵抗感が非常に強くあり、学生たちは緊張する。

見学実習の体験を振り返る時には日誌への記入を行い、それに加えて口頭でも発表を求める。つまり、書き言葉と話し言葉の両方で、自分の気づきを表現しなければならない。ソーシャルワーカーとして必要な言語化の方法を習得するためには、学習の積み上げが必要である。クライアントと関わる際、適切なコミュニケーションを図ることや、面接時のできごとを的確に文章化することが、専門職として求められる⁽²⁾。

以下は筆者が学習方法として工夫している点である。

第2～4回の授業で、視聴覚教材の感想とともに疑問や質問もリアクション・ペーパーに書くように指導を行い、学生の着眼点を中心に次の週の授業に反映させている。できるだけ学生に考えさせ、発言を促していくと、学生は自分の感想、疑問を発することに自信を持ち、次第に意見を述べることに慣れるようである。

第5回の授業になると、実習場面での留意点など、学生にとっても身近でイメージしやすい内容でもあり、学生は盛んに質問を始める。このように自分の意見を述べる機会の前に、自分が感想として書いた文章をもとに意見を出し合うという段階を踏むことで、教員や学生間の緊張が和らぐ印象を持っている。

第6回の授業では、見学実習の事前学習を行う。事前学習は主体的に学ぶ必要があり、

最近では見学先の情報を施設概要や行っている事業など分担して調べ、発表を行うかたちになっている。資料を読み込み、要領よくまとめて他学生に伝えることが求められるが、資料に基づいた発表であるため、比較的容易に行うことができる。

第7回に見学実習を行って、翌週第8回は事後学習の時間となる。この事後学習でいよいよ学生は自分自身の体験、つまり自分自身と向き合うことが求められる。どのような事象に出会い、何を感じたのかは、同じ見学実習を行っても一人一人で異なる。他学生と違う視点で語るという行動は、自分が現在持っている能力を総動員して「見て」、「感じて」、「語る」という必要に迫られるわけで、学生にとっては緊張感あふれる時間になる。客観的な資料に基づいて話すことには自信があるが、自分の主観に基づいた表現や感情の開示にはかなり慎重になる学生達の姿がうかがえる。

2-4 キーワードに基づく口頭発表

この授業では、2007年度から事後学習時に3つのキーワードを各学生に考えさせている。A4判の紙を横長に4分割したカードに、キーワードを大きく書き込んで発表を行う。2009年度からは自分の見学実習の目標も1枚加え、4枚のカードを用意している。これは学生が自分の体験した諸々の事象を、どのようにしたら要領よくまとめて発表できるかを考え、工夫したものである。また、この事後学習の授業の回には、あらかじめ記入した施設の概況表と日誌の提出も求めるので、体験の文章表現をすでに行ってから発表に臨むことになる。キーワードを3つに絞ってそれをもとに発表するのは、日誌記載の分量を勘案したためである。

キーワードのカードは大きく書くように指導している。これは、字数を絞って文字どおりキーワードにするためと、円座になっての発表で相手にカードが見えるようにするためである。体験した事象を簡潔なキーワードに絞るには、自分の感じたことを的確な単語にしなければならない。初期には慣れずに文章にしてしまう学生や、考え込んで非常に時間がかかってしまう学生もいる。このカードを手を持ちながら発表を行うことは、緊張からの「あがり」を和らげる効果があるようで学生にとって安心感がある様子である。

また、時間がある場合や学生数によっては、それぞれ書いたカードを見ながら質問をしあい、同じカテゴリーのカードを集めるなど、分類や比較など行って分析することもある。様々な比較を行うと見学当日の班ごとで体験の印象が違うことなどもある。これは見学時の案内担当者の職種（たとえば看護職と福祉職）によって案内と説明の視点が異なった結果のようであり、なかなか興味深い分析に至ることもある。

このようにキーワードのカード作りは、初期の口語表現・文章表現への取りかかりとして、有効な方法ではないかという印象を強く持っている。

3. 1年間の学生の変化

各学期の最終授業では、ふり返りのためのシートを用意し、学生に記入を求める。以下、その記述から、学生が学んだことを確認したい。

3-1 春学期のふり返り

春学期の終わりには、図2のような項目に回答を求める。

- 1) 実習で学びたかったこと
- 2) 実習で学んだこと（感じたこと、変化したこと等）
- 3) 実習で学びきれなかったこと
（もっと体験したかったことや、知りたかったことは）
- 4) 精神保健福祉士として、自分の今後の課題と思ったこと
- 5) 実習Ⅰの授業についての感想（授業内容、講師への要望等）

図2 春学期最終授業のアンケート項目

このうち、「実習で学んだこと」に学生（19名）が書いた内容で多かったものを以下にあげ、記述内容を例示する。

○精神科病院のイメージの変化（9名）

- ・「外見も中も暗いというイメージが抜けなかったのですが、実習で行ってみて、明るい患者さんやスタッフさんもいて、暗いというイメージはなくなりました。」
- ・「精神科病院への今まで持ってたイメージが変化しました。A病院が意外と開放的でアットホームな雰囲気だったので驚きを感じた。」

○各施設の役割や特徴の違い（6名）

- ・「施設の雰囲気などを実際に自分の目で見れたのがよかったし、それぞれの役割を知ることができた。」
- ・「それぞれの施設での違い、特徴。病院なら治療中心、社会復帰施設・センターとの違いが思っていた以上にはっきりとしていた。」

このほか、病棟の雰囲気、精神障害（者）に対する考え方の変化、職員の働き方を知ることができたことなどがあげられた。

これらの記述からは、精神科病院・精神障害（者）に対して抱いていたイメージが見学実習によって修正されること、また、施設の特徴を知るという目標もある程度達成されていることがうかがえる。

3-2 年度末の振り返り

2008年度秋学期の最終授業で（この時点で見学実習は図1 A～Fの施設で実施）、年間を通じて印象に残った施設・機関とその理由・感想を尋ねた。その結果、多く挙げられたのは、以下3施設である（複数回答）。学生18名の感想を例示する。

○E精神科病院（11名）

- ・「古い作りの病棟と新しく設備の整った病棟が見学できたことと、多くの患者さんに会えたことが印象的でした。」
- ・「初めて患者さんと『交流』する機会、ダンスと一緒に踊ったりして、初めての経験だったため、とても印象に残っている。」

○F作業所（7名）、

- ・「本当にみんな障害を持っているのかと思うくらい元気で明るかったのがすごく印象的です。みんなフレンドリーだったので。あと初めてSST⁽³⁾を経験したということも大きなインパクトを与えられました。」
- ・「初めて利用者さんの輪の中に入り、実際に接することができて、とてもよい経験になりました。利用者さんが抱える課題は私たちと共通する部分が多くあり、なんとなくうれしくなりました。」

○A精神科病院（7名）

- ・「初めて行った『古くからある病院』だからとても印象に残っています。病棟内を行き来する患者さん、狭い廊下、鉄格子、重い扉等、すべてが衝撃的でした。」
- ・「精神病院がどんな所なのかを体で感じる事ができたし、精神障害者に対するこわいという感情がなくなったという意味で一番印象に残ったかなと思いました。」

こうした感想からは、春学期の振り返りとはうらはらに、精神科病院では、今なお残る古い病棟の雰囲気、学生が強いインパクトを受けていることも伝わってくる。それと同時に、E・F2施設の見学実習では、患者・利用者との交流があることが印象を深めていることもうかがえる。

E病院では、学生も病棟レクリエーションに参加する。入院患者のダンスの輪に加わりながら、「どう接してよいかわからず、とまどっていた」と日誌に書く学生もいる。緊張し、話しかけられずにいた自分自身についての記述も目立つ。年度末の振り返りでは、「当事者の人との関わりにぎこちなさを感じることがあるので、ボランティアなどで勉強したい」と課題として意識する記述も見受けられた。

また、F作業所でSSTのグループに参加することも、貴重な経験である。メンバーが自分の課題に取り組んでロールプレイをしたり、発言したりする場面からも、当事者の力や真摯な姿勢、互いの支え合いなどを学んでいると思われる。

E・F2施設の見学実習は、関与観察（Participating Observation）である。そこでは、

鯨岡（2005）が指摘するように、「一方では関与することに神経を使い、他方では何を観察するのか、その場でおこっていることを捉えようと躍起に」なるという二律背反の難しさを経験することになろう。これは、配属実習では日々繰り返され、学生達が「日誌が書けない」と悩む理由の一つと考えられる。学生は、自分の関わり方がどうであったか（関与する側）に焦点を当てて記録することが多い。しかし、何をどう観察しているか、自分自身と相手との関わりがとらえられているか（観察する側）にも注目しつつ、学生の記録の指導をしていく必要があるであろう。

4. 今後の課題

4-1 授業における課題

精神保健福祉のさまざまな施設の現状を、授業を担当する教員の経験だけを通して伝えることには限界がある。視聴覚教材を用いたり、障害のある当事者の方々の講義を聴いたりすることにより、現場の生の声ができる限り学生に伝わるように更に工夫を重ねたい。

2007年度から3年余りにわたって、キーワードのカードを利用した事後学習を行い、学生達は口語表現には比較的短時間に慣れるという印象を持っている。春学期末には、見学実習をふり返っての簡単な発表は、カードを使わなくてもできるようになっている。スピーチの自信向上には講師のコメントが重要という報告（藤木・前川・勝又、2010）もあり、教員側が表現についての的確にフィードバックすることにも留意する必要があるだろう。

一方、文章表現については、今までの自分のスタイルをなかなか変えられない面がある。的確な文章表現を身につけるには、文章化の機会を増やし、フィードバックを繰り返すとともに、適切なモデルを示し、読んで学ぶことも重要であると考えます。

4-2 実習教育における課題

「実習Ⅰ」が配属実習への準備段階であることから、以下のような課題が考えられる。

授業で得た知識や資料等による情報は、ともすれば断片的に入っている。それらが見学実習で自ら体験した内容と結びつく中で、配属実習への動機や目標が生まれることが望まれる。また、「実習Ⅰ」で精神障害のある人と接し、コミュニケーションを図る体験が、各科目で学ぶ精神保健福祉士の援助にどう結びつくのか、学生がその道筋を知ることも必要であろう。

つまり、言葉での知識と体験から実感を伴って学んだことの統合が課題である。そのことを授業でも意識し、教員が一方から他方に言及し、関連づけることが有用かもしれない。

現場での体験から学ぶプロセスの中では、考えを整理し、筋道立てて述べる力が重要で

ある。それに加え、学生が配属実習で苦心する課題である、自分の感情に気づき、言葉で伝える力を伸ばすことにも取り組んでいきたいと考えている。

おわりに

「実習Ⅰ」の授業における留意点と、見学実習を通じた教育実践の報告を行った。「実習Ⅰ」は実習の初期段階にあり、精神保健福祉士としての動機の根づきをはかる時期であるとともに、学生は進路に迷いをもち、模索している段階である。教員が現場で感じ取っている現実や空気といったものを1年間で伝え、学生に進路に対する判断材料にしてもらう時間であることを考えると、責任の重大さを感じる。

すべての学生が精神保健福祉士として仕事につくわけではないが、体験から学ぶことや、的確な言語化を行うことは、分野を問わず求められる。そのことを念頭に置き、他の領域の知見や教育実践からも学びつつ、さらに授業内容に工夫を加えていく必要性を改めて確認した次第である。

謝辞

今回報告した見学実習は、毎年多くの機関・施設と職員の方々の多大なご協力を得て実施しているものであり、学生に貴重な学習の機会を提供して下さることに、篤く御礼申し上げます。また、精神保健福祉専修で共に実習指導に携わる山口 一先生、佐々木絢子先生に、感謝の意を表します。

【注】

- (1) 「障がい（障害・障碍）」の表記については様々な議論があるが、本稿では、現行の法令において「障害」・「精神障害者」等の表記がなされていることから、その表記をそのまま用いた。ただし、「市役所障がい福祉課」のような施設等の名称は、そのまま表記した。
- (2) 牧野田・荒田・吉川（2002）は、ソーシャルワークのための基本的な技術として、「観察する技術」「面接する技術」「記録する技術」を習得することが必要であると述べている。
- (3) Social Skills Training（社会生活技能訓練）の略称。ロールプレイを用いた練習等を用いて、コミュニケーション・スキルの向上を図る方法。

文献

- 藤木美奈子・前川志津・勝又恵理子（2010）「スピーチに対する自信は何によってもたらされるか - 授業内容との関係から -」『Obirin Today』10, 49-64.
- 河合美子・川久保祐子（2005）「精神保健福祉の実習教育」『Obirin Today』5, 135-145.

- 河合美子・友永美帆・佐々木絢子・加藤麻里恵・川井明（2009）「実習支援センターの役割と課題－実習事前指導を中心に－」『Obirin Today』9, 187-203.
- 鯨岡 峻（2005）『エピソード記述入門』 東京大学出版会
- 牧野田恵美子・荒田寛・吉川公章編（2002）『指導者のための PSW 実習指導 Guide』 へるす出版